

しあわせ

8 月 号



ぶつて こんどく
仏恵 功德をほめしめて

じつぼう うえん
十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは

ぶつとんほう
つねに仏恩報ずべし

(『浄土和讃』五十)

阿弥陀仏の慈悲のはたらきをほめたたえ、すべての世界の縁あるものに聞かせよう。すでに真実の信心を獲ている人は、つねに仏のご恩に報いるがよい。

(意訳)

※仏恵功德： 仏の慈悲のめぐみによる勝れたはたらき。左訓に「大慈大悲と功德とを」とある。

「手を合わせる母」

ウランバナ。中国では孟蘭盆と漢字があてられ、それが日本でお盆と言われるようになった。ウランバナという古いインドの言葉は、倒懸と訳されている。逆さに吊るされた苦しみを表す言葉である。

日本で、故人や先祖を追悼する法要行事として生活に密着した。地獄に堕ちて苦しんでいる母親を救うために供養したという故事から始まった行事と伝わっている。

安芸門徒の地・広島ではお墓に竹と紙で作られた盆灯籠がお墓に飾られ、夏の風物詩ともなっている。先だつた家族や親族を偲び、御仏壇やお墓にお参りして追悼の意を表す人間だけの美しい姿が日本中で見られる時期である。

人という名の動物、としてただ走り回って力尽きるのではなく、手を合わせ頭を下げてお礼ができる身となつてこそ、人間に生まれた甲斐がある。

法座案内

盆会法要

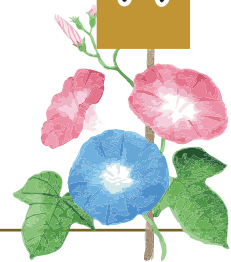
八月 九日(月) 昼席・夜席
十日(火) 昼席
講師 朝枝暁範師
(北広島町 本立寺住職)

聞熏会 一仏弟子に学ぶ

法味の会ーご和讃のこころー

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺
電話(〇八二二八)一四八二



① 仏さまを讃える ①

今回は『讃阿弥陀仏偈和讃』の最後の一首であり、仏さまをほめたたえ、仏さまのご恩に報いるべきことが和讃されています。

上讃仏徳・下化衆生といいい、仏さまを讃えて人々を導くことは菩薩の行とされますが、仏さまを讃えることは、じつは容易ではありません。なぜならほめるということは、相手の徳が正確にわかっているなければできないからです。ほめ過ぎたらおべんちゃんになり、ほめ足りなければむしろ貶したことになる。過不足なくその人の徳を見通していなければ、ほめることはできません。ですから、仏さまをほめることは菩薩でも至難であり、凡夫にできるはずはありません。ところが、

仏恵功德をほめしめて

十方の有縁にきかしめん：

親鸞さまは、仏徳をたたえて有縁の人々に聞かせようと仰います。どういうことでしょうか。

ところが次女は、次の日も、その次の日も、

なぜか「仏さまは目がわるい」というご法話をします。最初は分からなかったのですが、ふと思いつきました。毎週の幼稚園での仏参で、園児たちはこう唱和しているのです。

「み仏さまは、目には見えないけれど、いつも私につきそって、まもってくださいます」おそらく次女は「目には見えないけれど」という文章がよくわからず、「目は見えないけれど」という意味に受けとめていたのでしょう。だから阿弥陀さまは目がわるいというお話をしていたのですね。わたしが日々ご法話をさせていただいている姿も、同じなのだろうな…と思いいあわせました。どれだけ学問をつんでも、凡夫のことばはつねに見当違いであり、仏さまの影すらとらえられないからです。しかし阿弥陀さまは、それではダメだと仰る方ではありませんでした。そして親鸞さまは著書のなかで、このように説かれています。

最近、6才と3才の娘たちが一緒にお夕事をしてくれるようになりました。一緒にお念仏いただいて重誓偈をおつとめするのですが、その後さらに、ご法話までしてくれれます。お父さんのマネをしたいのでしょうか、次女は先日、こんなご法話をしてくれました。

「きょうは、あみださまの、おはなしです。あみださまは、めが、まっかになりました。めから血ができました。こどもたちはどうぶつえんで、ライオンさんがおしてくれました…：おはなしを、おわります！」

ご法話は「ご讃嘆」ともよばれ、まさに仏さまの徳を讃える営みなのですが、娘のお話は、仏さまをほめるどころか、日本語としても成り立っているかあやういですね。それでも、おさな子が背伸びして演台から顔だけ出し、仏さまのお話をしようとするとその姿は、わたしにとつて何よりうれしく、娘の称えるお念仏の声は、これ以上ないご法話でした。

「南无阿弥陀仏をとなふるは

仏をほめたてまつるになら、となり」

たとえ愚かな凡夫でも、お念仏称えるならば、仏さまをほめたことになる。ほめるのではなく、ほめたことになるのだと。阿弥陀さまは、仏さまの徳を知るよしもない私たちのために、この言葉を口にするならば、過不足なく仏さまの徳をほめたことになる、そういう言葉を与えてくださっていました。それが「南无阿弥陀仏」という御名なのです。ね。ともにお念仏をいただいで、仏さまを仰がせていただきましょう。右も左もわからないおさな子が「おかあさん」「おとうさん」とうれしそうに親をよぶ一声一声に、その子をつつむ親心の全体があらわれている。ちょうどそのように、子どもたちの口から、私たちの口からこぼれているお念仏の一声一声に、いのちをつつむ仏さまの徳が、過不足なく、現れきってくださっています。